

2年2組

 山羊といっしょに暮らしたいな  
 ～ミロちゃんといっしょ～


## 「できるだけのことをしたいと思った」

ミロちゃんの後ろ足のケガをきっかけに、ミロちゃんの幸せについて考え合いました。様々な意見が出される中で、「もう一匹飼えば、夜もいつも幸せなんじゃないかな」とYさんが訴えました。雄山羊を連れてきて、結婚させ、赤ちゃんを生ませてはどうかと言うのです。クラスがざわざわし始めます。「雄山羊に頭突きされるかもしれないよ」、「雄山羊とけんかするんじゃないかな」、「世話が2倍になるよ」、「赤ちゃんを産むときは、ミロも危険だよ」。たくさんの心配が子どもたちの中に生まれたのです。結局この日、結論は出ませんでした。

翌日も話し合いが続いていきました。その次の日も、話し合いました。2組の子どもたちが、こんなにも長い間、話し合ったのは、ミロを飼うと決めた時以来でした。それだけ子どもたちにとって大きなことでした。

話し合いを進める中で、子どもたちの心配は、大きく分けると2つあることがわかってきました。1つ目は、角のある雄山羊に頭突きをされて、ミロちゃんがケガをするのではないかとということ、2つ目は、出産によってミロが死んでしまうのではないかとということでした。1つ目の雄山羊については、わりと早く解決しました。それは、雄山羊を借りるメリーランドの雄山羊に角がないヤギが多いことを映像で確認したこと、また、Rさんがお兄さんの飼育の経験から「人に慣れているヤギならいいと思う」と発言したことが大きかったように思います。ただ、2つ目の、出産に伴う危険については、意見は割れたままでした。その時の思いをSさんが綴っています。

いのちがけだとおもった。ミロは、ここまでいっしょうけんめい生きてきたから、話し合ってぜんぶ  
 かいけつしなきゃ。ほんとのいのちをかけて育てなきゃ、ミロは死んじゃう。ほんとのいのちを  
 かけて話し合わなきゃ。

このSさんの思いには、話し合いの内容が色濃く反映されています。まず、「いのちがけ」というのは、Kさんが授業の最後に発言した「女は産むとき命がけ」という言葉に由来しています。大きな印象としてSさんの中に残ったのでしょう。このKさんの発言を受け、後に自分のお母さんに、自分を産んだ時のことをインタビューしてみてもどうかということになりました。また、Tさんが、「ふざけていてはだめ。死んじやってもいいっていう覚悟がある。」と皆に訴えました。「いのちをかけて話し合わなきゃ」には、みんなで覚悟を決めたいのだという強い気持ちも見てとれます。

翌日、お家の人へのインタビューをもとに話し合いをしました。そのことは、ミロちゃんに赤ちゃんを産ませるかどうかのヒントになるはずです。

インタビューを終えた翌日、再び話し合いです。まずは、自分が産まれた時のエピソードから伝え合います。「28時間かかって、すごく痛かったんだって（Yさん）」、「赤ちゃんが入る袋が破れて、入院したんだって。とても小さく生まれたんだあ。（Mさん）」、「1カ月入院したんだけど、産むときは痛くて痛くて、ベッドの手すりを壊しちゃうくらい力が入ったんだそう。（Kさん）」、「たいへんで、すごく痛くて、苦しかったんだって。（Iさん）」。「子どもたちから伝えられる様々なエピソード。一人一人にドラマがあり、ここに生まれてきたことが伝わります。ただ、そこには、子どもたちが想像していた、いや、それ以上の痛みや苦しみ、大変さがあることがわかりました。

つづいて、その時のお母さんや家族の気持ちです。「痛みをわすれるくらい、うれしかったよ。（複数人）」、「生まれてきてくれてありがとう。（Yさん）」、「がんばってそだてなきゃって思ったよ。（Kさん）」、「やっと会えたね。（Hさん）」、「『お母さんになったんだなあ』って言ってたよ。（Aさん）」、「うれしくて、とても幸せで、涙が

出たんだって。(Iさん)、「お母さん、感激で泣いちゃったんだって。(Yさん)。「すごく幸せで、ちょっと寂しかったんだって。(Aさん)、「指を握ってくれてうれしくて、一生この手を放したくないなあって。(Rさん)」。たくさんのおうちの人の子どもたちに対する思い。もう、教室中が温かい雰囲気になっています。「ミロ、どうしょっか」子どもたちに尋ねてみます。子どもたちの答えは、「雄山羊を飼って、ミロちゃんをお母さんにしてあげたい」というものでした。痛みや苦しみの先に、お母さんとしての大きな幸せが待っていることをおうちの方から教えていただくことができました。また、子どもたち一人一人が、待ちに待った存在として産まれてきたのだということも感じることができました。

話し合いを終えるころ、ミロちゃんがたくさんしっぽを振っていることに子どもたちが気づきました。発情がきたのです。発情は、赤ちゃんが欲しい印だということを子どもたちに伝えると、「ミロも赤ちゃんがほしかったんだ」と子どもたちから声が返ってきました。

この週末、雄山羊さんが来る予定です。

みんなのエピソードを聞いて、うむときはとても大変なんだなあと思いました。だから、わたしは、ミロが赤ちゃんをうむ時、楽にうめるようにできるだけのことをしたいと思いました。

ミロちゃんが、赤ちゃんをうんでお母さんになったら、ミロもあかちゃんもりっぱに育ててほしいです。

(Hさんのふりかえり)



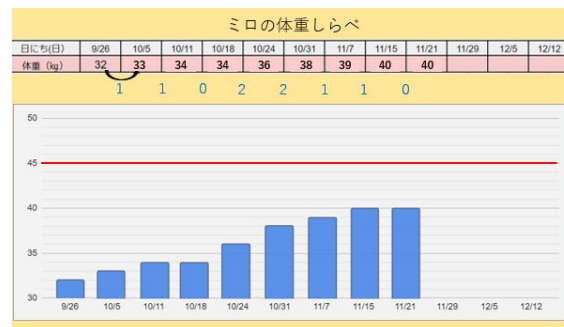
## 未来は わからないから できるだけのことをしたい

「ミロは、今日、少しだけ おかしかったです。ずっと ロロの小屋の方を向いていました。『ミロ』って よんでも ふりむくだけで こっちには ぜんぜん来ません。キャベツをさしだしても 少しだけしか食べて くれませんでした」

Sさんが、ミロノート（生活科のノート）に記したこの内容は、11月22日のミロの様子を実にわかりやすく伝えてくれています。この文を読むだけで、みんな「あっ発情だ！」とすぐに気づきました。子どもたちもその様子を思い出しながら、「ミロはそれくらい赤ちゃんがほしいんだよ」とRさん。「でも、交尾させてあげることができないのでちょっとかわいそう」とHさん。ミロとロロが仲よくする姿を微笑ましくも感じながら、交尾させることのできない歯がゆさも感じていました。ミロが安全に赤ちゃんを産むようにと子どもたちと設定したミロの目標体重は45kg～48kg。まだ、5kg足りていません。次にミロの発情がくるのは12月12日。子どもたちのミロをお母さんにしてあげたいという願いから、「ミロのつぎの発情の日に、体重が45kg～48kgにっているのかなあ」という問いが生まれました。



子どもたちとこの問いを解決したいと用意したのは、これまで週に1回のペースで記録してきたミロの体重の表とグラフでした。ただし、そこには、次の発情を迎えるまでの3回分の余白部分も付属しています。「この先、どう増えていくのかな」という教師の問いかけに、子どもたちは考えだします。Kさんが「1 kg、1 kg、0 kg、2 kg、2 kg（ずつ増える）」という決まりを見つけたから、この後2 kg、2 kg、1 kgって増えていくと思う」とします。Kさんには、これまでの増え方から数の決まりが見えたのです。



Mさんは、「今は、決めた量しか（餌を）あげていないから2 kgは増えない。1、1、1って増えると思う」とします。これまでのミロとのくらしを振り返っての考察です。また、SHさんは「ミロは微妙な増え方で大きくなっている。1、2、2って増えると思う」とします。「微妙な」という言葉に、単純にはいくはずがないという思いが伝わります。このように日にちと体重を見つめながら様々な意見が出されていく中、Tさんが発言します。「このことは、今はわからないと思う。だって未来のことは誰にも見えない。わからない。その日になってみないとわからない」と言うのです。確かにわたしたちのやっていることは、未来予想です。Tさんの言葉には、「予想は、予想でしかない」、「ミロは生きているんだから、そんな単純に数で表していきけるわけがないんだ」というような命と向かい合う真剣な思いが込められているのではないかと感じました。「それじゃあ、わたしたちにできることはないのかな」と問いかけてみます。すると、「神様にお祈りをする」とKさん。「12月の発情が近くなってあまりふえていなかったら餌を増やせばどうかな」とRさん。「12月5日に体重を測ってみて、考えるといい」とYさん。それぞれに予想した数から自分たちができることを考えていきました。

この日の、授業の振り返りに、Kさんが次のように記しています。

「未来予想をして、これぐらいかなってというのはわかったけど、本当にこうなるかどうかは誰にもわからない。だから、ミロちゃんにできるだけのことをしてあげたい」

過去のデータと自分たちの暮らしから、今後のミロの体重を考えていった授業。それは、Tさんの言葉を借りると「未来のこと」を考えていく授業でした。そこでは、数の決まりから未来の数を導き出す子、これまでの経験から未来の数を導き出す子がいました。ただ、その導き出された数には、どこか頼りなさが伴います。だって、ミロは生きているのですから。だって、未来は、決まっただけではないのですから。ですから、わたしたちは、Kさんのように「これぐらいかな」と思い描いた数を念頭に、今「できるだけのこと」をしていくのです。今日もまたミロとのくらしは続きます。